芹霊と
１００人の元カレ
7

芹霊と１００人の元カレ　７

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20360996

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, ヨシ霊(別れています)

芹霊前提、師匠総受けです。ヨシ霊（別れています）が含まれます。今回は本番ありません。倫理がアレです。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

- 芹霊と１００人の元カレ　７

芹霊と１００人の元カレ　７

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

「このあたりだと、相談所にも通いやすいですかね？駅もそこそこ近いし」
「いいと思うけど……この辺は家賃高いからなぁ……」
ベッドに座って壁に寄りかかっている芹沢の足の間に、霊幻が座って２人で賃貸情報誌を見ている。
「ええ、家賃払うの勿体ないから、買っちゃおうかなって思ってて」
「は！？」
驚いて霊幻は芹沢を見上げる。
「頭金ならすぐ出せますし、借りるよりいい部屋が多いんですよ」
「いやでも……お前、それ……」
──別れた後どうすんだよ。
言いかけて霊幻は口ごもる。
「……なんでもねえ」
「ね、この部屋どうですか！？一階にコンビニもあるし、大家さん一階に住んでるって書いてるから、治安も良さそう」
「……値段は大丈夫なのか？」
「うーん、ちょっと予算オーバーですけど、無茶苦茶ってほどじゃ無いです」
「……お前の金なんだから、最後はお前が決めろよ」
霊幻は賃貸なら家賃は半分出すつもりだった。だが購入するというなら話は別だ。
霊幻が金を出すと、別れた後、どう分けるかで揉める。
「じゃあ、ここにしちゃいましょう」

霊幻の思惑なぞつゆ知らず、幸せそうに芹沢はにへらと笑った。

※

夜間学校が終わって。
（今日も疲れたなぁ）
「ざわちゃん！」
ペットボトルのお茶を傾けながらぼんやりとしていると、よく芹沢を飲みに誘ってくれるグループの女の子が声をかけてきた。
「え、あ、何？」
思わせぶりに女の子は笑って、芹沢が着たチェスターコートをつまむ。
「ざわちゃんさあ、最近格好良くなったよね」
「え、あ、そう？」
「このコートとか、センス良いと思う」
「前から欲しかったやつなんだけど、思い切って買っちゃったんだ。そう言って貰えると嬉しいよ」
ジョンローレンス サリバンの、ウールチェスターコート。お値段約13万円。ほっそりとしたシルエットのそのコートは、背の高い鍛えられた芹沢の姿を頼もしく、上品に見せる。
ブランドも値段も知っている女の子はそんなことをおくびにも出さずに清楚に微笑む。
「ね、今度一緒に買い物に行こうよ。私ざわちゃんに合いそうな服屋いっぱい知ってるんだぁ」
「いいね、みんなに聞いてみようか」
優しげに笑う芹沢に、女の子は口を尖らせる。
「違うって、２人きりで行こう、って言ってんの」
にこにこしてた芹沢の顔が次第に真顔になって、女の子はびくりと震える。
「俺、恋人いるの、知ってるよね？」
「知ってるよ、あの浮気してた彼女さんでしょ？」
「恋人が誰かと２人きりで出かけるのがどれだけ辛いか知ってる俺に、君は何を言おうとしてるの？」

わなわなと女の子の唇が震える。
「ざわちゃん初カノなんでしょ！？もっと色んな子と遊んでみた方がいいって！話きいてたらさ、めちゃくちゃじゃん、その子！」
「恋愛に何回目とか意味あるの？君に俺の恋人の何が分かるの？もう一度言うよ、同棲が決まったって話したよね？……そんな俺たちに、君は何をしようとしているの？」
「オブラーーーーート！」
がし、と友人の１人が、芹沢を肩を組んで止めた。
「ざわちゃんが正しい。お前は反省しろ。でもな、ざわちゃん、正しいだけがいいことじゃねぇんだよ。波風立たせないようにとか、相手のプライドを真っ向からへし折らないようにとか、そういうことも大事なのよ？」
「そうなんだ……」
「そうそう。正しいことって人を傷付ける時もあるからさぁ。あの子も、引けなくなっちゃったんだよ」
「なんか、ごめんね」
女の子は苦笑して首を振る。自分でも大人げ無かったと思ったらしい。
「でもさ、初カノ大事にしたい気持ちは分かるぜ。この世で初めて──キスした人だもんな」
ひそ、と呟く友人に、芹沢は気恥ずかしそうに頷いた。

※

こっそりと芹沢の超能力も使い、引っ越しは安くで済んだ。
「じゃあ俺掃除してるから、芹沢はテレビでも見て、休憩してていいから」
「ありがとうございます」
細々としたものを超能力で壊さないように運んで、芹沢も少し疲れていた。
スマホでソシャゲのデイリークエを消化しながら、ペットボトルの生茶を飲む。
あちこちを掃除している霊幻が休む気配が無いのが、芹沢は気に

なってきた。
「……霊幻さん、俺、ご飯外に食べに行きたいです」
「え、俺、作るけど」
霊幻の手料理は食べたい。だが疲れてるであろう今ではない、と芹沢は思う。
「ここの近くの店、見てみたいんです」
「……そっか」
霊幻は微笑んで、出掛ける準備を始める。
こうして芹沢は、今日も『霊幻を家政婦扱いしていた』元カレたちを、知らずに打ち倒していた。

※

「じゃ、着替えて医者の指示に従ってくれ」
今日は自衛隊で性病検査をこっそりしてもらう日だ。
芹沢と霊幻の２人は、それぞれヨシフに別室に通された。
（俺と霊幻さんは調べること違うもんな）
少し違和感を感じながらも、芹沢はヨシフのやることに間違いは無いだろうと、指示に従う。

検査が終わって。

スーツを着て芹沢は霊幻を待つ。
「おー、芹沢、お疲れ。ちょっとこっちに来てもらっていいか？」
煙草を燻らせながらヨシフが手招きする。
「あ、はい」
ヨシフに連れられて、芹沢は静岡基地の研究棟の深部に進んでいく。
「この部屋だ」
（会議室かな？）
スタスタとヨシフが入っていくのについて、芹沢も薄暗い室内に入る。
明るい廊下から暗い部屋に入ったので、目が慣れずよく見えない。

「———俺を信用しすぎだ、と言っただろ？」

ばつん、と突然電気がつく。
スポットライトみたいにダウンライトが、ヨシフと拘束された霊幻を照らした。

ヨシフに銃を突きつけられた、霊幻を。

「霊幻さんッ！」
芹沢は手をかざすが、何も起こらないのに驚いて思わず手を見る。
（超能力が……！？）
「驚いたか？ここは研究中の超能力無効化部屋だ。桜威の呪い部屋を応用してる。まあ、ホワイトノイズが使えないのはちーっと不便だが……」
霊幻がぐったりと拘束された椅子の横の椅子に、銃口をずらさないままどっかりとヨシフは座り込む。
「まあ、どうってことは無い」
煙草を一服してから、ヨシフは足元のもう一つの銃を拾い上げ、芹沢に向ける。
「頭の上に手を置いて、ひざまずけ」
「っヨシフさん、どうしてこんなことを──！」

ガウン、と銃声が響いて。
芹沢の足元のすぐ横で、銃弾が跳ねた。

「聞こえなかったか？ひざまずけと言っている。……次は膝をぶち抜くぞ」
芹沢はガチガチと歯を鳴らしながら、両手を頭の上に置いて、両膝を床に付ける。
（あれはヘッケラー＆コック社製、SFP9。1発撃ったから最大残り15発──霊幻さんに向けている方は最大16発残ってる。俺が飛びかかったところで、オートマチックの拳銃はその隙に全弾霊幻さんの

頭にぶち込めてしまう）
必死に考えを巡らせる芹沢を、ヨシフは目を細めて見ている。
（運良く銃を奪えたところで、超能力の無い俺はヨシフさんに勝てない──複数段持ちのヨシフさんと１５年引きこもってた俺とじゃ話にならない）
「……芹沢、お前は賢いからなぁ、今の状況を正確に把握できているという前提のもと、話すんだが」
吹き出す冷や汗が不快だ。無能力の状態で突きつけられる銃口がこれほどプレッシャーになるとは、芹沢は思ってもいなかった。
（最悪なのは、こういう知識は全部ヨシフさんに叩き込まれた、ということだ──俺の考えることはヨシフさんに筒抜けだ）
芹沢が動かず、霊幻の安全を最優先に、するだろうことも。
「芹沢、お前に頼みがある」
「……なんですか。ヨシフさんの頼みなら、こんなことしなくても──」
「霊幻と別れてくれねぇか？」
ひゅ、と芹沢の喉が鳴る。
「貴方も元カレなんですか……！」
く、とヨシフは笑みで顔を歪めた。
「そうだ。俺は元カレ四天王が１人、狂犬のヨシフだ」
「とうとう二つ名まで出てきた……」
「あ？」
「いえなんでも無いです。……嫌です、別れません」
はあ、とわざと大袈裟にヨシフはため息をついて見せる。
「お前ね、この状況分かってる？断れば殺すぞ、って意味だぞ？」
ショックに芹沢は一瞬呆然とする。親しくなっていたと思っていたのは、自分だけだったのか、と。
「……わかりました」
「は？脅しだと思ってんのか？いいか、お前は裁かれてない前科モノだ。俺はお上の覚えもいい公務員。訓練中の事故だって言えば誰も俺も疑わない」
「でしょうね。俺だってヨシフさんを信じる」
芹沢は自虐的に笑う。

「死ぬのが怖くねぇのか」
「いいえ。ただ、俺は死ぬより苦しいことを知っているだけです」
ヨシフが銃をしゃくって続きを促す。
「爪で社長の命令に盲目的に従っていた時、俺はいつも胸が張り裂けそうでした。俺は俺の感情を無視して生きれるほど強くないんだ、と影山くんと友達になって思い知った。……霊幻さんからフラれるならともかく、俺が俺の弱さで霊幻さんを手放したら——俺の未来には、地獄しかないでしょう」
「死んだ方がマシだと？」
「ええ、死んだ方がマシです」
突然ヨシフはゲラゲラと笑い出した。
部屋に響く狂った笑い声を、じっと芹沢は耐える。
「幸せ者だなあ？ええ？このクソビッチが。いい彼氏持ってるじゃねえか——尻軽の分際で」
その言葉はあまりにうわっ滑りで、芹沢は眉を寄せた。
「芹沢は分かってんのか？こいつが色んな男に食い荒らされていて——」
つつつ、と霊幻に向けられた銃口が頬を撫でるように滑っていく。
「誰にでもすぐ、足を開くってこと」
胸まで滑り落ちた銃口が、こりこりと霊幻の乳首を手慣れたふうに刺激する。
「んっ……」
眠っているらしい霊幻が悩ましい声を漏らした。
「……やめてください」
「誰が触ってもこんな風に喘ぐんだぜ？よく考えろよ、芹沢。たった一度の人生だぞ？こんなアバズレに引っかかっていいのか？」
つつつ、と銃が滑って、霊幻の股間にグッと埋まる。
「ン……！」
霊幻がビクリと跳ねた。
「やめてくださいって言ってるでしょう」
芹沢の声に怒りが乗る。
「——俺だって知ってるんだぜ？コイツがどこをどうすれば啼くのか」

「ん、んッ……！」
ぐり、と冷たい銃口で会陰をえぐられて、ガタッと霊幻の足が跳ねた。
「やめてください、って言ってるでしょう」
「──お前が真剣に愛する価値は、霊幻にはねぇよ」
「っヨシフさんの価値感を押し付けないで下さい！！」
芹沢は唇を戦慄かせながら怒鳴る。
「貴方はそう思ったのかもしれない。貴方は優秀で、お金も持ってて、きっと女性にもモテるんでしょう。貴方は霊幻さんを捨てても何も思わなかったのかもしれない。……でも俺は違う。俺には霊幻さんしかいないんだ。こんな俺を、俺がどんな力を持っているかを知っていて、俺が何をしたかを知っていて、それでも側にいてくれるのは……俺にはこの人しかいないんだ……！」
ぐしゃり、と。
ヨシフが顔を歪めて、頭を落とした。

「……話をしよう。愚かな男の話だ」

「……」
「その男は、元カレ連合の調査のために、霊幻新隆に近づいた」
「……！」
芹沢はヨシフを凝視する。ヨシフは顔を上げなかった。
「元々霊幻とは腐れ縁の飲み友達みたいなものだった。度々彼氏と別れた時に都合良く呼び出されるような、そんな仲だった。……男は超能力者たちの見張りのために、霊幻と飲んでいただけだが。……しばしば『愛していた』と泣く霊幻を、馬鹿だなと思っていた」
「……」
「あいつがちょうど彼氏と別れた時ぐらいに、プロジェクトが始動した。これ幸いと口説いたら、案の定喜んであいつは付き合った」
「……」
「男は４日ぐらいで別れるつもりだった。ただ霊幻の元カレになりたかっただけだからな。……肉体関係が無いのもおかしいだろう

と、３日目で関係を持った」
「……」
「その時に食事の約束をした。まあ一週間ぐらいいいだろうと男は思った。食事をした時に、次のデートの約束をした。３ヶ月、用意した時間はある。２週間くらいはいいだろうと思った。ずるずると、ずるずると、１ヶ月が経った。……あいつとの生活は気安くて、楽しくて……終わらせるのが怖くなった。霊幻を失うのが、怖くなった。その頃に、他の任務で辛いことがあった」
「……」
「思わず霊幻を抱き潰して……次の日の朝、目覚めたら……陽だまりの中で、霊幻が、俺の傷に手を当ててて……」
「……」
「涙が出た」
「……」
「誰かと付き合って、こんなに穏やかな気持ちになったのは初めてで」
「……」
「しばらく幸せな日々を過ごした」
「……」
「あいつを……海に連れて行ったんだ。暑い日だった。波打ち際の水を跳ねさせるあいつを……ずっと眺めていた。光り輝く霊幻を、ずっと、気に入りの手巻きタバコをくゆらせながら」
「……」
「……そのころから、元カレ連合の嫌がらせが激化してきた。あいつが元カレと出掛けることも多くなって、俺たちは険悪になっていった」
「……」
「俺が久しぶりに休みが取れた日……どこかに行こうと霊幻を誘ったら、あいつ、お前と温泉に行くって言って」
「……！」
「許せなかった。仕事だって、前から予定してたって言われても、納得出来なかった。次の日、俺は朝から酒を飲んで……急いで帰ってきた霊幻を、酩酊したまま、俺は無理矢理抱いた」

「……」
「それでもズルズル俺は霊幻と付き合い続けた。最悪な状態だったが、セックスだけはしてた。……そして、タイムリミットが来た」
「……」
「俺はあいつが泣くのを見たくなくて、相談所で別れを告げた。異様に気が楽になったのを覚えている。悲しそうに顔を歪めたあいつを見て――ざまあみろと思った。そして、相談所を出て……足元が崩れていくのを感じた」
「……」
「俺は霊幻が切り替えが早いことを知っていた。明後日には新しい男を捕まえているだろう。それはいい。でも――」
「……」
「俺の生活に霊幻が居なくなるってことを、ようやく俺は理解した。今度行くはずだったメシ屋も、行きたいなと思ってたバーも、無くなるんだ、と。……それでも、元カレ連合をぶっ潰せば、その後、また付き合えばいい、口説けばいい、と俺は思い直した」
「……」
きゅ、と芹沢は唇を噛む。
「……あいつのためでもある、と思いながら元カレ連合に潜入しているうちに……どうやらあいつは元カレとは２度と付き合わないらしいということが分かってきた」
ふ、とヨシフは泣き笑いみたいな歪んだ顔を上げる。
「元カレ連合をぶっつぶして……あいつが幸せになれるようにしたって……俺はその隣には立てないんだと、知った」
ふ、とヨシフは小さく煙を吐く。
「国のために働いて、世界のために働いて、平和のために働いて、正義のために働いて……それで俺に残るものは、何もないんだ。何も、ない」
肩を揺らすヨシフの、それでも銃口はぶれずに芹沢を狙い定める。
「なあ、俺はどうすれば良かったんだ？霊幻と別れずに仕事を裏切れば良かったのか？そもそも霊幻へのロミトラを別のやつにやらせれば良かったのか？なあ？芹沢」
「……っ、答えの出てる質問をしないでください」

「……」
「それは貴方が何百回──いや、もしかしたら何万回も自分に問いかけて、そして答えを出したことだ。俺に聞いても同じことしか言えないです。きっと貴方はそうすべきだと思ったから、そうしたんだ」
「……俺はどこで間違えたんだろうな。俺はどうすれば霊幻を失わずにすんだんだ？」
今度は芹沢が頭を垂れる。
「ヨシフさん、貴方は一度も間違えていない。貴方はずっと正しかった」
「だったら、何故！」
「正しくても！」
芹沢は叫ぶ。
「……その正しさが、人を幸せにするとは限らないんです。ヨシフさんの正しさは、ヨシフさんを幸せにはしなかった」
「……」
「……それだけです」
俯いて、大きなため息をついて。
「……悪かったな、本題はここからだ」
ヨシフは銃を下げて、無理矢理笑った。
「お前もすでに元カレ連合の凶悪さには気が付いていることと思う」
芹沢は腕を下ろし、頷く。
「アイツらは最初は被害者の会みたいなものだったが──規模が大きくなるにつれ、段々と犯罪行為を行うようになっていった」
「そうなんですね」
「最初は霊幻への今カレへの嫌がらせから始まった。それがエスカレートし、鉄砲玉みたいな過激なことをするやつが現れた」
「……」
「あいつらには霊幻の今カレという共通の敵が、話題がある。元カレに政治家や警察官僚が混じり始めると、急速に元カレ連合は危険性を強めた。ギャング化したんだ」
「ギャング……」

「ある程度のお目溢しがあるのをいいことに、ドラッグの製造をはじめたり、ゆすりたかりを始めた。──元カレ連合は戦後最大の新興ギャングとなった」
「まじすか！？」
「真面目に聞いてくれ」
「真面目なんですけど……はぁ、すみません」
「そして元カレ連合で最大の資金源となっているのが……霊幻の隠し撮りブロマイドだ」
吹き出しそうになったのを芹沢は必死に耐えた。
「……ッあの、真面目に聞いてたんですが！？」
「俺は大真面目だが。いいか、暴力行為や、ドラッグを捌くってのは大変なんだ。捕まるリスクも高い。だが霊幻新隆の隠し撮りブロマイドを取引した所で捕まらないし、アイツが出張に行くのについていけば定期的に新作を仕入れられる。盗撮すらしたくない金持ちの元カレが大枚を叩いてくれるから、今となっては毎年億動く資金源になってる」
「ひぇ……」
「それを元手に銃をロシアから仕入れ始めてる。……完全に武装される前に叩かないと、警察側にも死者が出る。それに……」
ヨシフは湿気てしまった煙草を携帯灰皿に突っ込み、新しい煙草に火を付ける。
「……元カレ連合があるかぎり、霊幻は幸せな恋愛はできない」
「……霊幻さんのため、って言いたいんですか？」
「そうだ」
「……俺もそう思います」
「じゃあ、今カレであるお前に頼みたいことがある。……霊幻から、できるだけ元カレのことを聞き出して欲しい」
ふっ、と小さくヨシフは煙を吐き出した。
「元カレ連合の幹部でどうしても正体が分からないやつが何人かいるんだ。霊幻の元カレであることは確かだから、あいつから聞き出すのが確実なんだ」
「……分かりました」
「よろしく頼む」

ヨシフは立ち上がって椅子に銃を置き、霊幻の頬を愛おしげに撫でる。
「幸せに……なんて、口が裂けても言えねぇよ」
切なく笑って。
拘束を解いて、霊幻の手首に細いブレスレットを付ける。
「じゃあな。そろそろ霊幻の薬が切れる頃だ。……出口は部下に案内させる」
ヨシフが退室したので芹沢は立ち上がる。
椅子の上に置かれた２つの銃のマガジンを確認して。
「……弾は１発しか無かったんじゃないか……！」
乾いた笑いを上げた。
「ん……なんだ？ここ……」
霊幻が目を覚まして、あたりを確認する。
手首を見て。
「……ヨシフか」
荒々しくブレスレットを引きちぎった。
「え、なんで」
「これ、スモーキークォーツが付いてる。こういう匂わせするのはあの馬鹿ぐらいだよ」
霊幻は壊れたブレスレットを椅子の上に置いていく。
「帰ろうぜ」
「……ええ」
芹沢はブレスレットを拾って、そっとポケットに入れた。

※

「あの……霊幻さん、元カレのこと教えてくれませんか？」
「……なんで？」
芹沢から粉コーヒーを溶かしたカップを受け取りながら、じっと霊幻は芹沢を見る。
「知りたいんです。霊幻さんのこと」
ふむ、と霊幻は唇に手を当てて考え込む。
「分かった。気分が悪くなったら言えよ？……１人目は高校１年ん

とき、クラスメイトだった◯◯ ◯◯ってやつ。席が隣りで……」
芹沢はポケットの中でそっとスマホのボイスレコーダーを起動して。
霊幻が淡々と語る過去の恋を、彼を抱きしめて聞いていた。

続